廣讃寺ジャーナル

第11号
（発行所）
真宗大谷派
松岡山 廣讃寺
中村区城屋敷町3-30
TEL(052)411-5301
FAX(052)411-5341

二月十五日（涅槃会）

今日はお釈迦様の日だ。子供はグループをつくって城屋敷の地蔵堂におまいりする。庵主様が五色の餅を下さる。純白の紙につつんで手渡しでいただいた。甘味のないただ米の粉の餅だ。だがみんなうれしく楽しかった。きれいな餅だった。その地蔵堂も戦火で消えてしまった。隣の秋葉さんも今はちいちゃくなった。火もたけないそうだ。煙のなかに子供たちは陣どっておいもをやいたものだ。

二十年も前のことだ。九十歳で死んだつなさんが語ってくれた。

庵主さんの乳母車について巡礼の姿になって大治までいったものですよ。

「稲葉地地蔵堂 釋迦の ハイ ハイ」

白米一合、二合をいただいて、よなべ仕事でゴリゴリと粉にして、あの五色の餅をつくる。そのぬくもりをわすれられないと。

二月十五日お釈迦様の日だ。春も近い。

聖人のおことば

「コノ身ハイマハトシキハマリテ候ヘバサダメテサキダチテ往生シ候ハンズレバ浄土ニテカナラズ〈マチマヒラセ候ベシ」（有阿弥陀仏御返事）

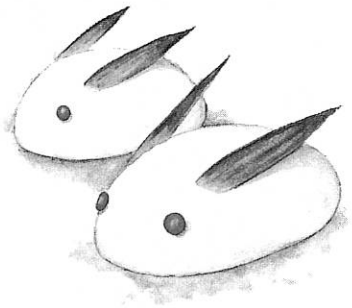
よくある風景である。女人講とか同朋会とかの集まりにおいて、おばあさん方の会話にみることが出来る。

「わしはよーもう八十五にもなったでよー、まあ先にいっとるわ」

「そんなことないわ。わしの方が弱っとるだでよー先だわ」

「おまあさんこの前の農協の御園座行っただか」

「行ったでよー。面白かってよ。わらってばっかしだわ」



「それみや、お前さんまだ元気だわ。わしの方が先だわ。たのむぜ」

何をたのむのかは分からない。言葉のあやかもしれない。説教の座においてよくみられる会話である。念仏はどこにもでてこない。念仏なしの会話が延々と続く。念仏のある会話と念仏なしの会話とは一枚の紙の裏表であると思う。

他人のうわさ話にうつつをぬかす。あれこれと他人を批評する。そんな時にふとわが身はいかがなものかと冷や汗をかく時がある。こんなわが身でよかったのかと、己の姿が己の鏡にうつる時がある。他人のこと

などいえたものではない。こんなわが身が厚かましくも生きている。ここらあたりまでくると何かたよれるものが欲しくなる。勝手念仏が頭をあげてくる。ここからの道のりがむつかしくもあり、むつかしくもない、人さまざまである。

お宮さんの犬

「お宮さんの犬はその後どうですか」

と案外(思いのほか)の人が尋ねてくださる。十二月中旬にお宮のすぐ東のマンションと竹林のほんのちょっとしたところでお産をして、四匹生まれたがその後どうなったことやらとAさんがいった。

「あんた、いつものように面倒をみてやらなかったのか」

「ちょうど猫の子をひろってきて、うちは満員だったの。さすがの面倒見のいい娘も今回はあきらめてそのままにしておいたの」

やがて大寒がくる。三匹の成犬と生まれた四匹の運命が気になってしようがない。門外漢は一片の同情心につかるだけで出番がない。ないどころか出番がきたら逃げ出すのが大方の人情でもある。

※行事予定（二月）

二月十四日（土）七時　同朋委員会・例会
十九日（木）二時～四時　学習会
二十八日（土）十時　二十八日講・女人講

※行事予定（三月）

三月十四日（土）七時　同朋委員会・例会
十九日（木）二時～四時　学習会
〔春季彼岸永代経・蓮如講　執行〕
三月二十日（祝）十時　おつとめ・委員長報告
おとき　説教　前田健　師
一時　おつとめ
三時　帰敬式
二十一日（土）三時　おつとめ・法話
二十二日（日）女人講・報恩講
十時　おつとめ・住職法話
おとき
一時　おつとめ・住職法話
二十八日（土）二十八日講・総会